平成２８年度リージョナルシアター事業

Regional Theatre Projects

事業報告書

一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

INDEX-目次-

はじめに　P 3

事業概要　P 4

派遣アーティストプロフィール　P 6

事業の流れ　P 7

各地のワークショップ・トピック　P 8

事業実施

川根本町文化会館（静岡県川根本町）　P 10

アーティストレポート　田上豊　P 15

文化フォーラム春日井・春日井市民会館（愛知県春日井市）　P 16

アーティストレポート　有門正太郎　P 19

大野城まどかぴあ（福岡県大野城市）　P 20

アーティストレポート　ごまのはえ　P 25

尼崎市総合文化センター・アルカイック（兵庫県尼崎市）　P 26

アーティストレポート　福田修志　P 29

ながす未来館（熊本県長洲町）　P 30

アーティストレポート　多田淳之介　P 35

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携のもと、全国の地方公共団体や関連の公益法人などが実施する文化・芸術活動に対し支援を行うほか、財団の自主事業として、研修交流事業、公立文化施設活性化推進、調査研究等の事業に取り組んでいます。

本事業は、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに最大３回派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施する事業です。平成26年度にはじまり、平成27年度は、みくに文化未来館、長野県伊那文化会館、静岡市民文化会館、三島市民文化会館、延岡総合文化センターの５団体、平成28年度は川根本町文化会館、文化フォーラム春日井・春日井市民会館、大野城まどかぴあ、尼崎市総合文化センター・アルカイック、ながす未来館の５団体で実施しました。

各参加ホールのプログラムは、地域のニーズに合わせて自由に企画され、小学校へ出向き授業時間を使ってのアウトリーチ、高校の演劇部員への演劇のワークショップ、地元演劇人に向けてのファシリテーター養成講座など、多彩なプログラムとなりました。

この報告書は、「平成28年度リージョナルシアター事業」において実施した事業内容をまとめたものです。地域の公立文化施設の職員や地方公共団体の芸術文化担当者が、演劇の手法を活用したワークショップを企画される際や、公共ホールの担当者と地域の表現者の共同作業を行う際の参考としていただければ幸いです。

平成29年３月

一般財団法人　地域創造

事業概要

1　趣旨

一般財団法人地域創造は、公共ホールの活性化と創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりに寄与し、あわせて公共ホールスタッフ等の企画・制作能力の向上と創造性豊かな地域づくりに資することを目的として、演劇の表現者（演出家）を公共ホールに派遣し演劇の手法を使ったワークショップを実施します。

2　対象団体

①地方公共団体

②地方自治法第244条の２第３項の規定に基づき指定管理者として指定を受け、公の施設の管理を行う法人その他の団体。

③地域における芸術文化活動の振興に資することを目的として設立された、公益財団法人等（②を除く。）のうち、地方公共団体が資本金、基本金その他これらに準ずるものを出資している法人で地域創造が特に認めるもの。

3　事業内容

演劇の表現者（演出家、以下派遣アーティスト）を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップを実施します。派遣アーティストは各地域最大３回（研修会を除く）まで派遣します。

（１）プログラムの実施時間

最大で計840分のプログラムを実施します。

（２）派遣回数

最大３回の派遣を行います（研修会を除く）。１回目は打合せや内部の研修、アウトリーチ先の下見に充ててください。

残り２回でプログラムを実施しますが、連続した日程にするなど派遣回数を計２回とする場合は、２回目が原則５泊６日になります。

【実施時間の考え方】

・プログラムの実施時間

１回目の下見を除いた派遣において計840分のプログラムを実施することができます。時間の配分は、参加団体と地域創造、アーティストの三者で調整します。規定の時間数や日数を超えるプログラムの場合は、別途謝金や経費が発生し、参加団体の負担となります。

・学校でのアウトリーチについて

学校（小・中・高校等）の授業枠でアウトリーチを実施する場合、１コマの時間は、小学校では45分×２時限（90分）、中学・高校等では50分×２時限（100分）を最小限とします。また、１コマの対象人数は１クラス約30人を目途にしています。

4　支援措置

（１）一般財団法人地域創造が負担する経費

①派遣アーティストにかかる経費

派遣アーティストにかかる研修会及び、下見、プログラム実施にかかる派遣３回分までの経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。学校でのアウトリーチを実施する場合のアシスタント２名分の経費（謝金、交通費、宿泊費等）は地域創造が負担します。

（２）参加団体が負担する経費

①研修会参加にかかる経費

ホール担当者の研修会の旅費（交通費、宿泊費等）は、参加団体の負担になります。

②プログラム実施にかかる経費

プログラムを実施する際の経費（会場使用料、機材使用料、消耗品等）は、参加団体の負担となります。

③その他

規定の時間や日数を超える企画の場合に発生する別途謝金や旅費等の経費は、参加団体の負担となります。参加申込書及び実施計画書を考慮の上、決定します。なお、派遣アーティストの指定はできません。

５　プログラムについて

演出家が地域で演劇のワークショップを行うことで、各地域の課題に取り組むことが可能になります。

演劇の手法を使った学校でのアウトリーチ、地元の演劇人や学校の先生、行政職員を対象にした研修会、地元の若い演劇人が派遣アーティストのアシスタントとしてワークショップに関わりステップアップを試みる、子どもたちを対象に演劇に触れる時間を持つなど、地域独自の様々なプログラムを自由に作成していただけます。

派遣アーティスト　プロフィール

派遣アーティストは派遣先の地域でワークショップを行う講師を務める他、公共ホールの企画するプログラムの内容について、ホール担当者と共に企画検討を行うコーディネーターの役割も兼ねます。

多田　淳之介　（演出家・俳優、東京デスロック主宰）

1976年生まれ、千葉県柏市出身。演出家、俳優。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。青年団演出部。俳優の身体、観客、時間を含めた現象をフォーカスした演出が特徴。古典から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。

富士見市を中心に、他地域、教育機関でのアウトリーチ活動、創作活動も積極的に行い、韓国、フランスでの公演、共同製作など国内外問わず活動する。2010年４月に演劇部門では国内歴代最年少で公共文化施設の芸術監督に就任。2013年韓国で最も権威のある東亜演劇賞にて外国人として初の正賞受賞となる演出賞を受賞。演出作品『가모메　カルメギ』は作品賞、舞台美術賞も受賞。おもな演出作品に『ロミオとジュリエット』『その人を知らず』『あなた自身のためのレッスン』『LOVE』『再／生』など。現在、四国学院大学非常勤講師。

田上　　豊　（劇作家・演出家、田上パル主宰）

1983年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。2006年、劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、疾風怒濤のテンポと、遊び心満載の演出は「体育会系演劇」とも評される。大学在学中にワークショップデザインを研究し、現在、教育現場を中心に、創作型、体験型のワークショップを全国各地で実施している。演劇部の嘱託顧問や、総合高校での表現科目「演劇」の授業を受け持つなど、教育現場での経験も持つ。高校生、大学生とのクリエーション、リーディング、市民劇団への書き下ろしなど、劇団外での創作活動も展開。現在、富士見市民文化会館キラリふじみアソシエイトアーティスト、青年団演出部所属。

有門　正太郎　（演出家・俳優、有門正太郎プレゼンツ代表）

1975年生北九州市出身。倉本聰主宰「富良野塾」現「富良野 Group」、泊篤志代 表「飛ぶ劇場」所属。高校演劇専科の講師経験を活かし、北九州芸術劇場「日韓合同キャンプ、チャレンジ!えんげき」の総合演出なども務める。役者として様々な全国ツアー公演などに参加する傍ら、自身の団体「有門正太郎プレゼンツ」を2005年より始動、作・演出も務め「笑顔になれば何でも出来る」を合い言葉に公演を重ねる。同時にアウトリーチ活動も積極的に行っている。九州俳優の会会長。役者として主な出演作品、富良野Group公演『明日、悲別で』『屋根』（作・演出:倉本聰）、北九州芸術劇場プロデュース『錦鯉』（作・演出:土田英生）『江戸の青空』（作:千葉雅子、演出:G2）、時空の旅『シラノ・ド・ベルジュラック』（演出:永山智行）など。

福田　修志　（劇作家・演出家、F’s Company代表）

1975年生まれ、長崎市出身。長崎大学教育学部卒。1997年にF's　Company（フーズ・カンパニー）を旗揚げし、以後、作・演出を務める。現代社会の中に潜む人間の弱さを寓話化して描く作風が特徴。長崎市主催の市民参加型舞台にも深く関わり、九州圏内の学校や地域での演劇ワークショップの講師や外部脚本の執筆、地元TVやラジオのCM出演なども行っている。

代表作『マチクイの詩』（第15回日本劇作家協会新人戯曲賞最終選考作品）、2009～2011年度長崎市自主文化事業『演劇による表現力育成事業』の講師、2011年度文化庁 『次代を担う子どもの文化芸術体験事業（派遣事業）』の講師。

ごまのはえ　（劇作家・演出家・俳優、ニットキャップシアター代表）

1977年大阪府生まれ。劇作家、演出家、俳優。佛教大学在学中より演劇をはじめる。1999年自身が劇団代表となって「ニットキャップシアター」を設立。以来、京都を創作の拠点に日本各都市で公演をおこなっている。作品には民族楽器の演奏や独自の身体表現が使われ、時に「わかりずらい」といわれる時もあるが元気に活動をつづけている。また近年は「古事記」にあるエピソードをもとに物語をつくっている。2004年『愛のテール』にてOMS戯曲賞大賞受賞。2005年『ヒラカタノート』にてOMS戯曲賞特別賞受賞。特技はムックリ。2016年度より京都造形芸術大学講師。

＜アドバイザー＞　内藤　裕敬（劇作家・演出家、南河内万歳一座座長）

岩崎　正裕（劇作家・演出家、劇団太陽族主宰）

事業の流れ

① 参加団体の決定（平成２７年６月）

⇩

② 研修会（平成２８年４月２０日、２１日）
会場：地域創造（１泊２日）
内容：参加団体ホールの担当者、派遣アーティスト、地域創造スタッフ、関係者全員が参加する研修会。派遣アーティストのワークショップ、セミナー、ディスカッションを行う中で、共通認識を持ち、情報交換を行う。

⇩

③ １回目派遣（原則１泊２日）
内容：派遣アーティストと地域創造スタッフが現地に出向き、打合せと会場下見、関係者を対象にしたレクチャー等（インリーチ）を行う。アウトリーチ実施予定の学校においての打ち合わせと下見を行う。

⇩

④ ２回目／３回目派遣（各回 原則３泊４日）
内容：現地にて学校アウトリーチ、公募型ワークショップなど地域住民等を対象にしたプログラムを実施。３回目派遣では最終日に事業全体を振り返り、今後の展望を話し合うフィードバックを行う。

⇩

⑤ 報告書提出（平成２９年２月末）
参加団体は、規定の様式にプログラム内容の詳細、担当者の報告および評価等を記述したものを地域創造へ提出する。

＊２回目派遣が４日間連続のプログラム（原則５泊６日）の場合は、３回目派遣はありません。

各地のワークショップ・トピック

リージョナルシアター事業はホールとアーティスト、地域創造の三者で、演劇的手法を用いて地域のニーズに即した多種多様なワークショップ・プログラムを作っていくことができます。平成28年度参加団体による特徴的なプログラムをご紹介します。

■教職員を対象としたワークショップ（川根本町）

近年、学校現場に求められている“アクティブラーニング”をテーマにワークショップを実施。教育委員会の協力を得て教職員の研修プログラムとして本事業が活用されました。教職員を対象としたワークショップは、ホールが学校アウトリーチを展開していくにあたって、学校側にその内容や意図、効果を理解してもらうのに役立ちます。

■ホールを身近に感じてもらうためのワークショップ（春日井市）

コンサートや演劇などの公演があるときにだけホールを訪れてもらうのではなく、日常的に身近な存在としてホールを知ってもらうことを目指したワークショップを実施。想像力を使い様々な視点によって、ホールの中の風景を再発見していきました。ホールを散策する“街歩き”のようなフィールドワークです。

■公民館を会場に出入り自由な参加型プログラム（大野城市）

事前に参加者を募らず、定期的なサークル活動に集まる高齢者と放課後に遊びに来る小学生たちを対象にワークショップを実施。公民館（コミュニティセンター）を広場のように開放し、日常的な時間の過ごし方と創造的なワークショップが隣り合わせになった生活に根ざしたプログラムになりました。

■第九合唱団を対象にしたワークショップ（尼崎市）

ベートーヴェンの第九交響曲を歌う市民参加合唱団を対象に、演劇的な手法を使ったコミュニケーションと表現のワークショップを実施。みんなで歌うということを、コミュニケーションを通じた表現行為と位置づけ、音楽的アプローチとは異なる方法で“相手に伝えること”をゲーム感覚で体験しました。合唱団員同士の交流を深めることにも役立ちました。

■ホールを遊び場にする“こども学校”（長洲町）

小学生たちを対象に遊びながら創造性を育むことのできるワークショップを実施。小さな町の小規模なホールの利点を活かし、ホールを遊び場、広場として子供たちに開放していくことを目的としました。地元劇団員もスタッフとして加わり、将来的にこのプログラムを継続させていくための担い手の育成も行いました。

川根本町文化会館（静岡県川根本町）　実施データ

実施団体	静岡県川根本町
実施ホール	川根本町文化会館
担当者	服部了士・泉寛子
派遣期間	１回目派遣　平成28年７月 2日（土）～７月３日（日） ２回目派遣　平成28年10月 1日（土）～10月４日（火） ３回目派遣　平成28年10月 7日（金）～10月11日（火）
アーティスト等	アーティスト：田上豊　　アシスタント：村井まどか　菅原直樹

■１回目派遣内容
　７月２日（木）ワークショップ会場下見（川根高校）、町内視察
　７月３日（金）企画内容打合せ
■２回目派遣内容
　10月２日（日）
　　13：00～17：00　教職員対象ワークショップ（参加者７名）
■３回目派遣内容
　10月８日（土）
　　13：30～15：20　川根高校伝統芸能部対象ワークショップ（参加者12名）
　10月９日（日）
　　10：00～15：00　小学校４～６年生対象ワークショップ（参加者８名）
　10月10日（月）
　　10：00～15：00　一般対象ワークショップ（参加者20名）

スケジュール

静岡県川根本町／川根本町文化会館

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="2">１回目派遣</th><th colspan="2">２回目派遣</th><th colspan="4">３回目派遣</th></tr>
<tr><th>７／２（土）</th><th>７／３（日）</th><th>10／２（日）</th><th>10／８（土）</th><th>10／９（日）</th><th>10／10（月）</th><th>10／11（火）</th></tr>
<tr><td>9：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>10：00</td><td></td><td rowspan="2">打合せ</td><td></td><td></td><td rowspan="5">小学校
４～６年生
対象 WS
10：00
～15：00
（途中１h
休憩あり）</td><td rowspan="5">一般
対象 WS
10：00
～15：00
（途中１h
休憩あり）</td><td rowspan="3">フィードバック</td></tr>
<tr><td>11：00</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>12：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>13：00</td><td></td><td></td><td rowspan="4">教職員
対象 WS
13：00
～17：00</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>14：00</td><td rowspan="4">会場下見
町内視察</td><td></td><td rowspan="2">川根高校
伝統芸能部
対象 WS
13：30～15：30</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>15：00</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>16：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>17：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>18：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>19：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>20：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>21：00</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

プログラム詳細

教職員対象ワークショップ
10月２日（日）13：00〜17：00

町内小中学校教職員を対象に、演劇の技法を活用したアクティブラーニングが学べる研修として実施した。

前半２時間は、田上豊さんが行っている小学生向け演劇ワークショップを体験。ジェスチャーゲームやイス取りゲーム、ゾンビ鬼ごっこなどのシアターゲームに始まり、与えられた台本の穴あき部分のせりふを創作して３人一組で演じた。

後半２時間はアシスタントの村井まどかさんが都立高校において実施している演劇授業を体験。５、６人のグループに分かれ、「走れメロス」のストーリーに自分たちで考えたエピソードを追加し演じ、チームで正解のない課題に取り組むという経験をした。

最初はどんなことをやるのかと緊張していた参加者だったがコミュニティの雰囲気が目に見えて良くなり、「教科書通りではなく物語の行間を読み、グループでお互いのイメージを共有し、自分たちで自由に想像し考えることがアクティブラーニングにつながり、子どもにとって楽しい授業になると感じた」「参加する前は演劇が学校現場とどう結びつくのかと思ったが、受講し、今日の内容が、即、授業に取り入れることができると感じた。」「自分のことをうまく表現できない子どもがこのワークショップを経験することで、自分の思いや気持ちを人に伝える能力が身に付くと思う」などの感想が聞かれた。

川根高校伝統芸能部対象ワークショップ
10月８日（土）13：30〜15：30

過去の実績から本館の舞台芸術を最も鑑賞していない年代が高校生。今回の企画を町内に唯一ある川根高校へ相談したところ、授業での実施は無理だが部活動の一環としてなら可能ということで、町の伝統芸能である赤石太鼓演奏に取り組む「郷土芸能部」を対象にワークショップを実施した。

時間の制約がある中、シアターゲームから、３人一組による劇の創作と発表まで行った。演劇発表は当初、生徒だけの予定だったが顧問の先生２名も積極的に参加し、生徒と一緒になって取り組んだ。

ワークショップは和気あいあいとし、アーティスト、アシスタントともに高校生と年代が（ノリが？）近く、終始笑顔があふれた。

参加した生徒は全員、普段の部活動で共に活動する仲間ではあったが、先輩後輩、男女の壁を越えてワークショップに取り組み、「新たな発見があった」、「コミュニケーションが深まった」、「演奏表現の参考になった」などの感想が聞かれた。

ワークショップ終了後は、アーティストに対する和太鼓演奏披露や、アーティストも和太鼓を叩くなど、アウトリーチならではの交流もあった。

プログラム詳細

小学校４～６年生対象ワークショップ
10月９日（日）10：00～15：00

参加希望者がなかなか集まらず苦労をしたが、子どもや保護者が集まる場に直接出向いて勧誘し、何とか８人の参加者を集め実施した。

午前はイス取りゲーム、ゾンビ鬼ごっこなどのゲームから始まり、２人一組になり、１人が別の所にいる人物を見て特徴を言葉で伝え、もう１人がその説明をもとに似顔絵を描くというワークを行った。

午後は言葉を発しないジェスチャー伝言ゲームやテキストの穴あき部分のせりふを自由に考える創作劇に３人一組で取り組んだ。創作劇の発表場所は館内のどこを使ってもよいとし、それぞれシナリオにあった場所を探し自由な発想で演じた。

子ども達はワークショップを通じ、言葉を使わず伝える難しさと言葉だけで伝える難しさを同時に体験し、自由な発想で自由に表現できる正解がない課題に夢中で取り組んだ。

子ども達は皆、演じたことが楽しかったと言い、迎えに訪れた親にワークショップの内容を興奮して報告し、保護者は子どもの反応に驚いていた。

一般対象ワークショップ
10月10日（月）10：00～15：00

一般対象ワークショップは、主に町内の文化団体から参加者を募り、それぞれをつなぐことを目的としていたが、蓋を開けてみると20名の参加者の半分は町外からで、世代も10代から70代までと、非常に幅広い年代・立場の人々の集まりとなった。

午前はシアターゲームの後、アシスタントの菅原直樹さんによる演劇の手法を用いて認知症の方との関わり方を体験するワークショップを実施。ボケを正すのではなく演技で受け入れるというワークを、認知症患者の立場と介護人の立場になり体験した。

昼食は地元産食材をふんだんに使った特製の弁当をワイワイガヤガヤ食べ、より交流を深めた。

午後はジェスチャーゲームなどの後、３人一組になりテキストの穴あき部分を自由に考えシナリオを創作し、他のグループが作った台本を演じた。前日同様、創作劇の発表場所は館内のどこを使ってもよいとし、それぞれのグループがさまざまな（職員も思いつかないような）場所で演じ、発表時はちょっとした館内観劇ツアーとなった。

参加者からは、高齢化率45％を超える川根本町にとって認知症や介護のテーマは身近で参考になったという感想や、ワークショップの続編や応用編実施を望む声、様々な人との出会いや交流を喜ぶ声が多く聞かれた。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

▼川根本町における演劇ニーズの掘り起こし

川根本町には演劇団体がなく、学校にも演劇部はない。今回の実施を通して川根本町での演劇ニーズを掘り起こし、今後演劇の事業を展開していくうえのきっかけとしたいと考えた。今まであまり演劇に力を入れた事業を実施したことがなく、絶好の機会であると捉えていた。

▼演劇による豊かな次世代の育成

川根本町文化会館の目指す目標の一つとして「芸術文化による次世代育成」を掲げている。演劇という新しい分野に触れることで次世代育成をより図りたいと考えた。

▼地域資源の再発見

アーティストが地域資源に触れることによって、新しい価値を見出だされる。景観や郷土芸能などの川根本町固有のものとアーティストが出会う機会を設けたいと考えた。

●企画・実施において苦労した点

▼実施内容やターゲット設定など

実施にあたり大まかな考えはあったが具体的なプランはなく、４月に地域創造で行われた研修時に田上さんから「事業を通じて川根本町文化会館は何をしたいのか？」と問われ、担当として頭が真っ白になるところから始まった。現状を見つめ直し、この事業から最終的にどのような成果を目指すかを考え、次世代育成を考えた「小学生」、会館へ一番足を運ばない「高校生」をターゲットとするほか、町内各団体の交流を狙う一般向けワークショップを企画した。

▼ワークショップ実施にあたり学校との調整

川根本町ではここ数年毎年コンテンポラリーダンスやクラシック音楽のアウトリーチを小中高校で行っており、これ以上授業数を使ってのワークショップ実施は難しいという事態となった。交渉の末、高校生は部活動での実施にこぎつけたが、小学生対象ワークショップは参加者を公募することとなった。

▼公募による参加者集め

小学４・５・６年生対象の公募としたワークショップは、様々な機会に声掛けをしたにもかかわらず９月末まで希望者0名と参加者確保に苦労した。町内在住の４・５・６年生は全員でも98人しかいないとか、３連休の中日実施は厳しいとかの言い訳はグッと飲み込み、ダンス教室や他団体の催しなど、子どもや保護者が集まる場に直接出向いて勧誘し何とか８人の参加者を確保した。一般向け参加者も町内文化団体への直接交渉や、知り合いから輪を広げるなど、最後まで粘り強く声を掛け続け参加者を募った。

▼公募型ワークショップを昼食付とした

公募型ワークショップとした小学生と一般向けを、あえて10時開始15時終了とし、川根本町産食材をふんだんに使った特徴ある弁当を付け、参加費を500円とした。弁当手配など苦労はあったが好評で、同じ弁当を参加者全員で和気あいあいと食べることによる交流も生まれた。

●プログラムを実施した成果

▼町内小中学校教職員の研修として実施

下見時の打合せの中で田上さんから、新しい学習指導要領で「アクティブラーニング」がキーワードの一つとなっており、演劇の手法を用いた「教職員向けアクティブラーニング研修」が実施できるというお話をいただいた。ぜひ実施したいと考え企画書を作り教育委員会に持ちかけたところ、町内小中学校教職員を対象とした正式な研修として実施することとなり、各校から選出された教職員と教育委員会職員の参加による研修を実施できた。結果、町内すべての小中学校に今回のワークショップに参加した教職員がいる。

▼さまざまな世代を対象に実施し反応を目の当たりにできたこと

今回の事業で、小学生、高校生、教職員、一般公募という幅広い年代に対してワークショップを実施することができ参加者の反応を目の当たりにできた。町内での演劇のニーズ掘り起こしに繋がったこともあるが、今後どのような事業が展開できるかどうかについてとても参考になった。

▼多世代間と町内外の文化芸術を通した交流機会の創出

一般公募の参加者は10代から70代までの参加があり、普段は会うことがない世代での交流が生まれた。また、町外からの参加者も多く、都市部と山間部など住む場所が違う者や職業など立場の違う人々での交流もあった。

▼川根本町という地域と演劇の向き合い方についてのヒントを得るきっかけとなったこと

リージョナルシアターを始める前と後で圧倒的に変化があった点としては、演劇を今後川根本町という地域にどう展開できるかという可能性やヒントを得られたこと。必ずしも公演に結びつけたり、アウトリーチも小中学生のクラスに対して行わなければならないという固定概念のようなものから脱却できたようにも思い、幅広い視点をいただいた。

●今後の展望

▼継続的実施と演劇を活用した事業の展開

まずは年間で数回でも良いので演劇ワークショップを続けることで、継続的に地域に根付くよう実施していき、その中で、演劇を活用した事業を展開していきたいと考えている。例えば、川根本町は高齢化率が45%を超えるが、高齢者と演劇作品の創作、伝統芸能（太鼓など）との作品創作、行政・教職員の研修としての演劇ワークショップの活用、お試しではなく実際に発表や作品創作を目的とした子どもたちとのワークショップ・公演、まち歩きを演劇的に演出して実施することなどさまざまな展開をしていければと考えている。

地域の潜在的な想像力を引き出す

田上　豊

地域の特性を捉える

静岡県川根本町は、静岡市と浜松市に挟まれた中部に位置し、その総面積は、静岡県内で三番目の山あいの町です。町域の90パーセント以上が森林で、山々の織りなす四季折々の美しい景観を生かした寸又峡温泉や接岨峡温泉、日本で唯一のアプト式鉄道を有するなど観光資源も豊富にある一方、高齢化率が40パーセントを超えた県内トップの深刻な高齢化問題に直面しています。

リージョナルの場合、私たちアーティストがどうしても切り離せないのが出向く先々の「地域性」です。どんな地域なのか、どんな人達がいるのか、どんな歴史的、文化的背景があるのか、そういったことに留意する必要があります。その上で、劇場のミッションと照らし合わせながらプログラムを柔軟に練り上げて行きます。この汎用性の高さが演劇のアウトリーチの特徴です。つまり、劇場から地域の特性を加味した具体的なミッションが提示されるほど、アーティストは的を絞ったワークショップの実施が可能になります。

多様な対象へのアプローチ

川根本町文化会館で実施したワークショップのコマは、「小学生」、「高校生」、「教職員」、「一般」の四つ。劇場の粘り強いリサーチと尽力によって設定された珠玉の四枠だったように感じます。それぞれに「表現とコミュニケーション」、「芸術の多様性」、「アクティブラーニング」、「高齢化地域と演劇」という具体的なテーマが提示され、ワークショップを実施するこちら側も講師を複数人揃え、多角的なワークショップを展開しました。その結果、参加者もいろんなタイプのワークショップと出会う機会となり、職員と参加者の間に、「事業者と観客」という垣根を越えた新しい関係性が生まれたように思います。また、参加者同士の間にも体験を共有することで生じる同族意識のような連帯感が発生し、今後の活動次第では新しいコミュニティとして組織することも期待出来ます。

人との繋がり、劇場との繋がり、表現との出会いなど、川根本町の実施は、全体を通してとても実りが多く、川根本町の今後が非常に楽しみな機会となりました。さらに、川根茶を飲み、温泉につかり、吊り橋を渡ってアプト式鉄道に揺られる、そんな桃源郷のような環境がアーティストを奮起させたことも記しておこうと思います。川根本町と、マイナスイオンのなせる技です。

演劇ワークショップの汎用性

演劇のワークショップは、言葉、身体、演技、集団性、価値観の再発見、コミュニケーションなどを例にとっても、主軸にできる素材は多岐に渡ります。また、それらを組み合わせることも可能で、さらに他ジャンルとのコラボレーションに優れているのも演劇の特徴です。最近では、介護と演劇、防犯と演劇など、社会生活の中の活動とリンクさせたワークショップのプログラムも開発されています。これからももっといろんなタイプのアウトリーチが登場してくるでしょう。つまり、まだまだ余白に溢れている。この余白に可能性を見出し、変幻自在な演劇（上演芸術全般と言い換えてもよいと思いますが）のもつ多様性を用いて、地域の生活向上や文化寄与のためにアウトリーチの企画を考えていくことが、劇場のみなさんの使命であり、楽しみだと思います。是非、地域の特性を改めて見定め、アーティストのワークショップの内容（味）を把握し、この組み合わせをもって自分の地域でどんな化学反応が期待出来るかを想像してみてください。実施までこぎつけて成功すれば、それはきっと地域の未来の芽（財産）を創出する機会となり、演劇のアウトリーチにとっても新たなる可能性を見出すチャンスとなると信じています。

文化フォーラム春日井・春日井市民会館（愛知県春日井市）　実施データ

実施団体	公益財団法人かすがい市民文化財団
実施ホール	文化フォーラム春日井・春日井市民会館
担当者	相馬加奈子
派遣期間	１回目派遣　平成28年７月14日（木）～７月15日（金） ２回目派遣　平成28年８月９日（火）～８月14日（日）
アーティスト等	アーティスト：有門正太郎　　アシスタント：脇内圭介　藤松妙子

■１回目派遣内容
７月14日（木）ワークショップ会場下見、市内視察（ワークショップの素材とする民話にまつわる史跡等の見学）
７月15日（金）ワークショップのデモンストレーション、企画内容の打合せ、市内視察
■２回目派遣内容
８月10日（水）13：30～17：00　小学校４～６年生対象ワークショップ（参加者18名）
８月11日（木）13：30～17：00　一般対象
ワークショップ（参加者18名）
８月12日（金）13：30～17：00　中高生向けワークショップ①（参加者９名）
８月13日（土）13：30～17：00　中高生向けワークショップ②（参加者９名）
※中高生向けワークショップは２日連続のプログラム

スケジュール

愛知県春日井市／文化フォーラム春日井・春日井市民会館

	１回目派遣		２回目派遣				
	７／14（木）	７／15（金）	８／10（水）	８／11（木）	８／12（金）	８／13（土）	８／14（日）
9：00		デモンストレーション・企画打合せ					
10：00							フィードバック
11：00							
12：00		市内視察					
13：00							
14：00	会場下見		小学校４～６年生対象 WS 13：30～17：00	一般対象 WS 13：30～17：00	中高生対象 WS ① 13：30～17：00	中高生対象 WS ② 13：30～17：00	
15：00							
16：00	市内視察						
17：00							
18：00							
19：00							
20：00							
21：00							

プログラム詳細

小学校４～６年生対象ワークショップ
８月10日（水）13：30～17：00　対象：小４～６

「夏休みだ！文化フォーラムであそぼう！」と銘打ち、集まった子どもたちが、自分たちで遊びを考えてみるプログラムを行った。自己紹介後に行った名前鬼では、子どもたちがルールを把握した後、名前鬼のルールをアレンジし、盛り上がった。また、子どもたちの距離感が縮まった後、「どうしたら段ボールが早く運べるか」等、子どもたちからアイデアを募集し、実際にやってみるといったワークも行った。

後半は、参加者に数枚のだまし絵を見せ、頭の発想を柔らかくした後、市内で撮影した写真を数枚配布。各々に「何に見えるか」という視点からタイトルを考えてもらい、その写真が、より自分が考えるものにみえるよう落書きをしてもらった。最後に、配布された写真が春日井市内に伝わる昔話のスポットだと知らされ、参加者たちは驚いていた。

一般対象ワークショップ
８月11日（木）13：30～17：00　対象：どなたでも

「あつまれ～！市民会館たんけん隊」と銘打ち、今年で50周年を迎える春日井市民会館を探検するプログラムを行った。探検出発前、簡単な自己紹介ののち、参加者に複数のだまし絵を見せ、発想を柔らかくするワークを行った。

その後、探検の際は、３つのグループにわかれて出発。その際、出されたお題は、館内で“本当は●●だけど、自分には▲▲に見えるもの”をみつけ、写真を撮影すること。参加者たちは､必死になってお題をクリアしていた｡探検から戻った参加者は、撮影した写真を印刷したものに、タイトルをつけ、さらに自分の考えるものに近づくよう落書きを行った。落書き後は、参加者が発見したものを発表し、お互いの発見や視点の違いに驚いていた。終了後には、参加者の作品をひとつにまとめた「市民会館たんけん記」が完成した。

中高生対象ワークショップ
８月12日（金）13：30～17：00
８月13日（土）13：30～17：00

“地域に伝わる昔話を取り入れた物語の創作”を目標に、２日間にわたるワークショップを行った。

１日目は、お互いを知り、コミュニケーションをとることを中心としたワークを行った。

２日目は、いよいよ創作へ。複数のだまし絵をもとに、参加者の発想を柔らかくし、様々な角度から物事をみる視点をつくりだしたのち、４枚の写真を配布。２つのグループにわかれて、物語を創作するワークを行った。参加者は、４枚の写真をつかって物語を創作し、その物語を自分たちの身体だけで演じるという課題にチャレンジした。

ワークショップの最後に、配布された４枚の写真が、実は春日井市内に実在し、むかし話の名所として残っている場所だと知らされて、参加者は驚いていた。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

市内演劇部の活性化

リージョナルシアター事業への参加を通じて、中高演劇部の先生や生徒と良好な関係を作っていくきっかけとしたいと考えた。また、中高生に文化財団の事業を知ってもらうことで、高校を卒業した後も、地元で演劇に関わっていくきっかけをつくりたいと考えた。

子どもたちに楽しい演劇体験を

当財団では、７月から８月の期間中、【昼涼みプロジェクト】という子どものためのワークショップ事業や鑑賞事業を展開している。【昼涼みプロジェクト】の一環として、子ども向けの演劇ワークショップを開催することで、まだ演劇に触れたことのない小学生やその親世代に気軽に演劇の魅力を知ってもらうきっかけとしたいと考えた。

●企画・実施において苦労した点

リージョナルシアター事業を実施する上で、ホールのミッションを考えること

中高生向けのワークショップの実施にあたり、地元の中学校の先生にヒアリングをした結果、先生たちが演劇ワークショップに求めるものは、演技力の向上を目的としたプログラムだった。しかし、単に演技力の向上を目的としたプログラムを実施することは、リージョナルシアター事業を実施する上で、ホールのミッションとしてふさわしくないことも、地域創造のお話を聞いて理解していた。プログラムを実施する上で、地域のニーズに対して、どう折り合いをつけていくか…。最初は着地点のイメージがつかず苦労した。地域創造の皆さんに相談にのっていただいているうち、この折り合いの着地点こそが、“演劇を通じて人と地域をつなぐ”というホールのミッションになるのだと分かりはじめた頃から、リージョナルシアター事業を実施するホールのミッションをクリアにイメージできるようになった。

広報について

“演劇という言葉を使わずにどう広報していくか”“プログラムの内容を具体的かつ魅力的にどう表記できるか”といったことに苦労した。

●プログラムを実施した成果

地域とつながった参加者たち

１日目のプログラムでは、参加した子どもたちは市内を撮影した写真にタイトルをつけて絵を描くワークを通じて、春日井という地域の中に、特別な場所を作ることができた。２日目のプログラムでは、市民会館の中で自分が“面白い”と感じる場所を探すというプログラムを通じて、参加者ひとりひとりにとって、市民会館がより特別な場所になったと感じた。３～４日目の中高生のための演劇ワークショップでは、“もっと演劇がしたい”と集まった中高生９名が、ワークのひとつひとつを目を輝かせながら楽しんでいた。参加者同士の結束も強く、本プログラムをきっかけに仲良くなっていた。また、プログラム終了後も、当財団の自主事業の公演の際に鑑賞に来てくれたりと、参加者と文化財団スタッフとの関係も作ることができた。

４日間、どのプログラムも“春日井ならではのもの”かつ“有門さんならではのもの”であったため、参加者は自ずと、地域とつながり、有門さんというアーティストとつながることができたと感じた。

演劇事業の未来について、考えるきっかけに

今回のワークショップの実施を通じて、担当者として地域の中に演劇があることの意味を再認識することができた。また、有門さんや地域創造の皆さんとお話をするうち、「今後、春日井では演劇をどうするのか」ということをホールスタッフ皆で意識し、話し合うことができた。

●今後の展望

ワークショップはもちろん、演劇公演の創作においても、春日井でしかできないものを作り続けていきたい。また、地元で育った若い表現者が、地元で伸び伸びと活躍できる場所を作っていきたい。

演劇と地域住民、繋ぐ公共施設、そして最後は人間力

有門　正太郎

はじめての“演劇ワークショップ”にじっくり向き合う

魅力的な立地と人口増加の街、愛知県春日井市にあるかすがい市民文化財団が管理している文化フォーラム春日井、春日井市民会館の両施設で幾つかのワークショップを行った。隣の名古屋市では活発に演劇公演、ワークショップなど行っている。名古屋のベッドタウンと言うべき春日井市は年々人口が増加している数少ない町で、日本で二番目に古い大規模ニュータウンもある。ニュータウン住民の高齢化も最近の問題のようだった。文化フォーラムかすがい、春日井市民会館、春日井市役所が同敷地にある立地は人が集う場所に適していた。春日井市民会館の自主事業は基本的に買公演と呼ばれる事業をメインで行う事業形態、ワークショップなどは隣の文化フォーラム春日井で行っている。

演劇のプログラムはじめてという事もあり担当者との打ち合わせに時間を要した。最初は「地元の演劇部の顧問も喜ぶ事だから地元の高校演劇部へ出向いて演技指導して欲しい」という内容だった。

担当者と公共性について、ホールのミッションについて、今回のリージョナルシアター事業について、長い目で見た春日井市民とのつながりについて意見交換を行った。そして何度目かのやりとりで担当者から「春日井の民話」をベースに作れないか、それを題材に将来的に市民劇がやりたいという意見が出された。対象は中高生で。時期はお盆で。「お盆、中高生、民話、」を演劇で。このミスマッチな感じが何よりもゾクゾクした事を思い出す。しかし多様性のある演劇だからこそなせる技である。やっとアーティストの出番、地域の課題を材料にアーティストが料理する、そして完成したプログラムを持って事前打ち合わせに春日井へ。その際に行った職員向けのインリーチではアーティストとコーディネーターの役割についても触れた。市民とどう向き合いどう付き合って行くのか、演劇というツールを使いアーティストと市民をどう繋ぐのか、またその地域性、何を優先順位として選んで行くのかが問われるのではという話は他の職員も含め意見交換できた事は有意義だった。

演劇の多様性を活かす

その他の２つのプログラムでは、稼働率の下がってきた市民会館をもっと知ってもらい足を運んでもらうきっかけをつくるためのバックステージツアーも含めた写真ワークショップと小学４～６年向け「自分たちの遊びを作ろう」ワークショップを企画した。どれも想像性に訴えるプログラムで、小・中高生向けには民話や地元の写真を素材にした。事前打ち合わせで民話の舞台を史跡も含め散策する事が、自分にとってこの街を知る大きな要素になった。街に愛着を感じるとわくわくしてくる。

演劇は多様性があり様々な関わり方がまだまだある。だからこそわかりづらく誤解されやすい側面もある。より多くの職員にこのプログラムを周知してもらい体験してもらう事で今後の演劇との関わり方の糸口になったら嬉しい。なるべく丁寧に担当者には「大切なのはこれからだ」と伝えた。お盆に開催したが多数の職員に触れた事は担当者の努力の賜物だと思う。この企画に対する熱量が伝わった。最後は人間力なのかもしれない。最後のフィードバックでは録画も行い、参加できない職員にも共有したいと申し出があった。館長含め９名のフィードバックはこの企画を締めくくる本当に有意義な時間だったように思う。

コーディネートする力の重要性

どのホールも同じような問題を抱えていると思うが、コーディネーターとして目利きになる事を切に希望したい。それは今後の方向性にあったアーティストの選出、アーティストの持つ特性を見極める力、それが市民へ還元できるプログラムへ繋がっていくのかなど様々だ。なぜワークショップをするのか、意義を市民に伝える事も大切な使命だ。アウトリーチでは学校現場にアーティストが出向く必要性を端的に述べなければならない。

皆で同じ方向を向くためにはホールの持つミッションも必要ではないかと思う。色々述べると大変そうだが、今回のようにまずは経験するしかない。自ら感じ自ら自問自答して進む事が何よりも今後の春日井の財産になっていくように思う。アーティスト側も同じ事が言える。創作に相互作用する関係を担保できるか、アーティストが技術的でなくアーティスト性を求められる現場になっているか、今回の春日井で自分自身のあり方についても非常に考えさせられるいい課題をもらった。また来たいと言っていた中高生たち、市民会館が好きになったと言ってくれた親子、「春日井名前オニ」という遊びを作った小学生、市民とどう次に繋がって行くのだろうか。ワークショップ中によく用いる言葉「答えはない、だから楽しい」。これからの春日井を、楽しんで前にぐいぐい進んで欲しい。

大野城まどかぴあ（福岡県大野城市）実施データ

実施団体	公益財団法人大野城まどかぴあ
実施ホール	大野城まどかぴあ
担当者	飯田愛弓、星賀はるか
派遣期間	１回目派遣　平成28年５月９日（月）～５月10日（火） ２回目派遣　平成28年６月７日（火）～６月10日（金） ３回目派遣　平成28年11月８日（火）～11月11日（金）
アーティスト等	アーティスト：ごまのはえ　アシスタント：高原綾子（２／３回目）、 織田圭祐（２回目）、本間広大（３回目）、山谷一也（３回目）

■１回目派遣内容
５月９日（月）企画内容の打合せ、アウトリーチ先訪問・会場下見
５月10日（火）ワークショップ会場下見、アウトリーチ先訪問・会場下見および事業へ参加
■２回目派遣内容
６月７日（火）アウトリーチ先訪問・会場下見
６月８日（水）９：15～10：45　大野城市立大野東小学校アウトリーチ（対象：３年１組35名）
11：00～12：30　大野城市立大野東小学校アウトリーチ（対象：３年２組34名）
６月９日（木）８：45～10：25　大野城市役所職員研修ワークショップ（対象：新規採用職員21名）
11：00～12：30　大野城市立大野東小学校アウトリーチ（対象：３年３組35名）
■３回目派遣内容
11月８日（火）14：00～16：00　東コミュニティセンターワークショップ（対象：高齢者・小学生20名）
18：30～20：30　一般公募ワークショップ《１日目》
11月９日（水）18：30～20：30　一般公募ワークショップ《２日目》（対象：一般参加者のべ28名（小学生以上））
11月10日（木）13：00～15：00　フィードバック
15：30～17：00　公共施設職員向け研修ワークショップ（対象：文化施設職員、行政職員など参加者17名）

スケジュール

福岡県大野城市／大野城まどかぴあ

	１回目派遣		２回目派遣			３回目派遣		
	５／９（月）	５／10（火）	６／７（火）	６／８（水）	６／９（木）	11／８（火）	11／９（水）	11／10（木）
8:00								
9:00					市役所職員 8:45 ～ 10:25			
10:00				大野東小３年 9:15 ～ 10:45				
11:00		ホール打合せ		大野東小３年 11:00 ～ 12:30	大野東小３年 11:00 ～ 12:30			
12:00								
13:00								フィードバック
14:00		コミュニティセンター 下見・打合せ	コミュニティセンター 下見・打合せ			コミュニティセンター 14:00 ～ 16:00		
15:00								
16:00	小学校下見							公共施設職員 15:30 ～ 17:00
17:00	ホール打合せ							
18:00								
19:00						一般公募 18:30 ～ 20:30	一般公募 18:30 ～ 20:30	
20:00								
21:00								

プログラム詳細

大野東小学校アウトリーチ
６月８日（火）９：15～10：45、11：00～12：30
６月９日（水）11：00～12：30

今までアウトリーチを実施したことのない小学校で実施することになり、校風や特徴などの情報が少ない中で実施に至りました。

講師紹介に始まり、一つ一つ民族楽器の名前、使い方や音の紹介からワークショップに入りました。子供達は見たこともない楽器や、普段は楽器として使わない生活品などの“モノ”に終始興味津々。色々な楽器に実際に触れ、音を感じ取りました。その後“踏切”“夕立”“夜道”“海”“ひとめぼれ”“お腹が痛い”“花火”“歯医者”と与えられたテーマに沿って想像する音を班に分かれて創り、その１つ１つのテーマが繋がった物語の効果音として披露しました。

子ども達の夢中になって純粋に音づくりを楽しんでいる姿はとても印象的でした。１つのテーマの中に様々な音が存在していること、班で話し合い音を創る過程で友人が感じているイメージがすべて違うことに驚いたようで、仲間と“思い一つ”にする難しさを実感していました。学校生活では普段あまり刺激することのない想像力や発想力に働きかけたワークだったので、今回のワークショップで体験したことが、これから子ども達が何か行動を起こすきっかけや発見に繋がっていればと思います。

大野城市役所 新入職員研修ワークショップ
６月９日（木）８：45～10：45

市職員はどの業務においても市民との方々との関わりがあり、そこではコミュニケーションが必要不可欠です。また職場内もコミュニケーションは存在し、今、市職員のコミュニケーション能力の向上が求められています。市民と協働して働く職員として必要な能力やコミュニケーションスキルなど職員一人一人の資質向上のため、そして将来的な地域リーダーの資質向上を目的として行政への事業紹介も兼ねて職員研修のプログラムの中に組み込んでもらえるよう依頼し、実施しました。

事前打合せ時に地域のために働く市職員に少しでも地域のことを知って欲しいとごまさんに相談したところ、“民話”を使ったワークをご提案いただきました。地域に伝わる民話をもとに物語を書き下ろしていただき、博多弁をとりいれたオリジナル作品が出来上がりました。

物語の中に登場する“夕立”“しょっぱい音”“お風呂ソング”などといったテーマに沿って班に分かれたあと、想像力を働かせ仲間とイメージを共有し合い、音を創作しました。

相手に自分の意志を伝えることはもちろん、それと同じくらい、相手の意志・伝えたい事をくみ取ることが重要だという感想を持った職員が多く、また自分が伝えたい事を相手に正しく伝える難しさをひしひしと感じていたようです。ワークショップを通して、両者が歩み寄ることで「コミュニケーション」が成り立つものだと、身を持って体験出来る貴重な機会になりました。またワークショップを通して、文化芸術の魅力発見に繋がっていたり、地域に愛着がわいたりと少しでも変化があればいいなと思います。

プログラム詳細

高齢者向けワークショップ
11月８日（火）14：00～16：00）

当初、高齢者施設（デイケアセンターなど）での実施を予定していましたが、市内４か所にあるコミュニティーセンターで高齢者仲間が集まる“カフェ事業”が行われているとご紹介を受け、実施にいたりました。カフェは時間になると地域の方々が集い、コーヒーを飲みながら、おしゃべりをしたり、刺繍をしたりと皆さん思い思いにゆったりとした時間を仲間と過ごす素敵な空間でした。

高齢者を対象とするワークショップは初の試みで、手探り状態で進めることになり、３回目派遣時に実施しました。１回目の派遣時から下見を兼ね、ごまさんもカフェに参加。まずは参加者の皆さんと交流を深めていただきました。

家族の話や地域の話、趣味など交流していく中で参加者の皆さんの中に顕著に表れていたのは“演劇は上演するもの・観るもの”ということでした。この場でも「演劇」のハードルが高いということに直面し、カフェの皆さんがどうにか参加していただけるような仕掛けを一緒に考えていただきました。ごまさんは「カフェの空間を壊すことはしたくない」と、ワークショップの始まりや終わりの時間を設定せずにゆったりとした時間の中で始まりました。珍しい民族楽器に惹かれ、楽器を手にとり“海”“踏切”“雨”“花火”のお題に対してデーブルごとに自然とワークショップが始まっていました。

参加者からは「新鮮で楽しかった」「思いがけない幸せを感じることができました。また開催してください」など次回を望む声を聞くことができ、笑顔あるれる充実したワークショップを実施することが出来ました。今回のワークショップで“きっかけ”をいただいたので、これからどのように発展していくか目的を定めて事業を繋げていかなければと考えています。

一般対象公募ワークショップ
11月８日（火）・９（水）18：30～20：30　※ 両日とも

一般公募ワークショップは「だれでも楽しめる演劇体験」と打ち出し、参加条件にある程度ゆとりを持たせ、小学生以上・演劇経験問わず募集を行いました。結果的に小学２年生から70代までと非常に幅広い年代、様々な立場の方々が集まり、普段では出会えない人々が交流する機会ともなりました。

１日目は、まずは民族楽器に触れ、楽器の特徴や特性を各自感じながらテーマに沿った音を創り、参加者との交流を深めていきました。

２日目は、民話「庄屋に化けた古狸」を創り上げることを目標にワークを行いました。テキストから参加者みんなで音を拾い上げ、登場人物や効果音担当など配役を行い１つの物語を創り上げました。

参加者からは「音楽･楽器からのアプローチで演劇をつくっていくのは楽しかった」「子どもと大人も一緒に楽しむ事が出来た」「音の楽しさから演劇の良さを体感できて楽しかった」など充実感のある感想が寄せられ、喜びの声が多く聞かれました。

公共施設職員向けワークショップ
11月10日（木）15：30〜17：00

文化芸術事業を実施するにあたり、公共施設職員自身が文化芸術の魅力を実際に体験し、その意義と可能性を理解することは必要不可欠です。また今後の事業企画の参考にしていただき、講師や他館の方々との交流の場になればと思い実施しました。

講師紹介に始まり、民族楽器の名前、使い方や音の紹介からワークショップに入りました。その後、民話「庄屋に化けた古狸」の物語の中に登場する“雨の音”“夕立”などといったテーマに沿って班に分かれ、仲間と想像する音のイメージを共有する時間を設けました。

ワークショップを通して地域の“素材”や“財産”を活かしたプログラムとして、また、総合芸術である演劇表現の魅力を存分に体感できるプログラムとしても事業紹介ができました。特に「民話」というどこにでもある地域資源に着目した内容は大変好評で、早速今後の事業に取り入れたいという声が多く寄せられています。地域に目を向けるとまだまだ活かしきれていない資源がたくさんあり、地域の魅力ともいえる資源を発掘していくには、そして地域色を出した事業にするには「何をしたらよいのか」と改めて考えさせられるワークショップとなりました。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

当館ではここ数年アウトリーチに力を入れて実施しており、学校等からの参加申込も年々増加の傾向にあります。しかし、実施校が増加し学校からの期待は大きくなる一方で、アーティストやプログラムが固定化しつつあり、現状のまま実施し続けてよいのか？ 一度アウトリーチの見直しを行い、プログラムも充実させて、さらなるステップアップを！と考えていました。またステップアップとともに、学校だけでなく高齢者や未就学児など当館に来館することが厳しい方々へと視点を変え、地域に向けて何か実施できないだろうか？と漠然と考えていました。

そのような時にステージラボで同じコースを受講した地域創造の職員さんからご案内いただいたことにより、リージョナルシアター事業を知りました。本事業は学校だけでなく様々なプログラムを自由に組み合わせが出来ること、そしてアウトリーチプログラムの中でも最も充実を図りたかった演劇分野での実施・アーティスト派遣が可能であること、この２つの要素はとても魅力的であり、アウトリーチにおいて必要なノウハウも集約されている本事業は職員の資質向上のための貴重な機会ともなるため、このリージョナルシアター事業を好機と捉えて参加を希望しました。また、本事業を通じて演劇が持つ教育的側面が子どもたちの成長を促す一助になることを学校や行政関係者に紹介し、文化芸術が持つ役割についての理解へ繋がることを期待し、実施へ臨みました。

●企画・実施において苦労した点

ワークショップのプログラム内容やその効果などを学校側へ具体的に伝えることが難しく、実施校の確保に苦労しました。過去に演劇プログラムを実施した小学校へ出向き、提案･説明しましたが実施までは至らず、結果的には他事業でお付き合いのあった学校長を当たりようやく実施校が決まりました。

学校側の演劇に対するイメージが“演劇＝演じる”という茫然としたイメージでしかないこと、演劇に対するハードルが高いことは提案する時点で想定していたので、演劇が持つ「教育的効果」になる要素を分かりやすく過去の意見や感想などの実例を用いて説明を行いましたが、それでも受け入れは厳しく演劇アウトリーチの難しさを痛感しました。

しばらくして提案した内容と学校の求めるニーズが合わなかったのかもしれないと気づき、調査不足であったことを反省し、調査を丁寧に行うことの必要性と受け入れ側の希望するポイントを押さえる重要性を改めて感じました。

●プログラムを実施した成果

どのプログラムにおいても参加者の方から“楽しかった”“演劇に対する見方が変わった”などという感想が多く寄せられ、関係者からは“いつでも協力するよ”という心強いお言葉をいただき、双方と良い関係・繋がりを築くことが出来ました。

多様な対象に向けて実施したことでいろいろな発見があり、新たに地域とコネクションを創ること、新しいベースを生みだすことができました。その土台はこれから発展していくためのヒントとし、アウトリーチの可能性を広げ、同時にプログラムを開発していきたいです。

今回、対象によっては実施内容のボリュームを加減しましたが全てのプログラムにおいて同じワークショップが実施されました。正直なところ対象に合わせた内容の違うワークショップを見てみたかったという気持ちはありますが、ホールの思いや、目指すべき目的を言葉にかえ、１人のアーティストの演劇観に寄り添いながら内容を創出していく過程（作業）は自分自身の芸術観を問われることになりました。様々な思いを模索していかなければならなかったので苦しみましたが、コーディネーターとしてとても勉強になりました。

●今後の展望

実施したプログラムの対象は、すべて“新しい場”であったので、まずは継続した実施を考えています。高齢者や市役所新入職員、公共ホール職員向けなど、今までとは違った対象にワークを実施したことで、アウトリーチのノウハウ習得の他にも大きな成果を得られ、職員にとっても、ホールにとっても良い転機になりました。それと同時に今回の連携先から新しい可能性の芽（声）を掴み得たような気がしていますので、掘り下げてこれからの活動に少しずつ反映させていきたいです。また、今まではホール側がプログラムの構築から実施までをすべて担っていましたが、このリージョナルシアター事業を通して、連携先（地域）と一緒にプログラムを生み出し、新しいアウトリーチをつくっていくのも面白いのではないかと期待が膨らんでいます。これからも地域と共に成長・発展していきたいです。

公園のようなホールを目指して

ごまのはえ

大野城市は古くから朝鮮半島との関わりも深い歴史をもつ街だが、現在は福岡市の近郊都市として福岡市内で働く人たちのベットタウンの性格が色濃い。主催した劇場は同市にある大野城まどかぴあ。様々なワークショップを行ったが、ここでは大野城市内のコミュニティセンターで行ったオープンスペースでのワークショップと、大野城まどかぴあで行った一般向けワークショップの二つを取り上げたい。

オープンスペースでのワークショップ

このワークショップは大野城市にある東コミュニティセンターで行った。ここは地元の方の集会場になっており様々な人が訪れる。今回のワークショップでは開催時間を正午から15時くらいまでとだけ決め、施設の色々な場所を移動しつつ、そこにいた人と一緒にワークショップをするという構成を立てた。オープンスペースでのワークショップでもあり施設内を移動するという意味では回遊型とも呼べるワークショップだ。オープンスペースでは、通常のように募集で集まった人ではなく、たまたま施設に（別の目的で）来ていた人たちを対象に行う。つまり、対象者それぞれの関心に合わせて参加できる内容にしなくてはいけない。この種の開催形態では、内容にも向き不向きがあるだろうし、また開催に向けての準備にも、通常とは違う気遣いが必要になる。今回のワークショップを終えて、オープンスペースでのワークショップには公園管理人のような態度が求められるように思った。遊びがいのある遊具をそろえて、子供たちを待ち構えている公園管理人のような態度が必要とされるのではないだろうか。

また劇場の視点で考えた場合、ホールではない場所で行ったことの意味は大きい。前述のとおり同会場は、すでに地元住民の交流の場として機能を果たしている。このワークショップによって、そこに集う人たちに大野城まどかぴあの存在をアピールすることができた。そして公共施設同士が、協同して企画、実施したことは今後の地域活動にプラスになると思う。このワークショップ以外にも「まどかぴあ」とコミュニティセンターは様々な共同企画を実施しているようだが、ぜひ続けてほしい。今後も、オープンスペースのワークショップは様々な所で開催されるように思う。ただ思うのは一生活者として、自分の暮らす地域の市役所や、図書館でこのようなワークショップが開催されていたら、私は参加するだろうか、という疑問だ。休みの日くらい誰とも喋りたくないという気持ちが私にはある。今後このようなワークショップを依頼されたら、その点を考慮してメニューを作成したい。

関係性の距離を活かすワークショップ

続いて一般向けに開催した通常のワークショップについて。内容は地元につたわる昔話を、私が持参した民族楽器をつかって、劇中音楽をつくりながら読み進めていくというもの。事前に劇場と併設されている図書館に行って、使えそうな昔話をさがしたが、私の準備不足もありあまりいいお話を掘り出せなかった。無念。それでも、ワークショップ自体はとても和やかに、刺激的に進んだ。参加者は親子連れが二組。年配の方が数名。30代、40代の方もいた。特に印象に残っているのは、二組の親子連れだ。二組ともお母さんと子供が二人の組み合わせだった。進むにつれ、だんだん親子が離れている時間が多くなる。子供たちは離れてしまったお母さんをチラチラと気にしていたが、やがてチラチラとも見なくなり、自分のやりたいことに熱中してとりくみはじめた。お母さんもそう。子供より創作にのめりこんだ。大げさに言えばその瞬間は、親子関係より創作が優先されたのだ。この体験は親子にとって貴重だと思う。どう貴重かはよくわかりませんが。

継続性を阻まない環境つくり

今回のワークショップのラインナップは上記の二つ以外にも、市内の小学校へのアウトリーチや、市職員を対象にした研修目的のもの、これからワークショップを展開していく意志のある方々に向けたものを行った。いずれもその開催意図が明確で大野城まどかぴあの現在と、進むべき未来を見据えたプログラムだったように思う。ただ一つ懸念がある。それは劇場職員の雇用環境だ。今回企画の中心を担ってくださった方を含め、大野城まどかぴあの実務の方はほとんど契約職員のようだ。せっかく今回のような未来を見据えたプログラムを実施しても、職員が入れ替わっては、効果は半減以下だと思う。

尼崎市総合文化センター・アルカイック（兵庫県尼崎市）実施データ

実施団体	公益財団法人尼崎市総合文化センター
実施ホール	尼崎市総合文化センター・アルカイック
担当者	山田勝夫
派遣期間	１回目派遣　平成28年６月15日（水）～６月16日（木） ２回目派遣　平成28年10月５日（水）～10月８日（土） ３回目派遣　平成28年11月28日（月）～12月１日（木）
アーティスト等	アーティスト：福田修志　　アシスタント：松本恵　田中俊亮

■１回目派遣内容
６月15日（水）企画内容の打合せ、ワークショップ会場下見、市内視察
６月16日（木）アウトリーチ先訪問・会場下見

■２回目派遣内容
10月５日（水）台風接近により休校となったため、実施を翌日に延期
10月６日（木）15：50～17：00　園田学園高等学校演劇部　対象ワークショップ（参加者10名）
　　17：30～18：40　第九合唱出演者　対象ワークショップ（参加者13名）
10月７日（金）15：50～18：00　園田学園高等学校演劇部　対象ワークショップ（参加者11名）

■３回目派遣内容
11月29日（火）10：45～12：20　尼崎市立園田東小学校アウトリーチ（対象：５年生20名）
　　13：50～15：20　尼崎市立園田東小学校アウトリーチ（対象：６年生25名）
11月30日（水）８：45～10：25　尼崎市立園田東小学校アウトリーチ（対象：３年生23名）
　　13：50～15：20　尼崎市立園田東小学校アウトリーチ（対象：４年生26名）
12月１日（木）８：50～10：25　尼崎市立潮小学校アウトリーチ（対象：６年１組27名）
　　10：45～12：20　尼崎市立潮小学校アウトリーチ（対象：６年２組27名）

スケジュール

兵庫県尼崎市／尼崎市総合文化センター・アルカイック

	１回目派遣		２回目派遣		３回目派遣		
	６／15（水）	６／16（木）	10／６（木）	10／７（金）	11／29（火）	11／30（水）	12／１（木）
８：00							
９：00						園田東小3年 ８：45～10：25	潮小6年1組 ８：50～10：25
10：00		ホール打合せ					
11：00					園田東小5年 10：45～12：20		潮小6年2組 10：45～12：20
12：00		潮小打合せ					
13：00		園田東小 打合せ					フィードバック
14：00					園田東小6年 13：50～15：20	園田東小4年 13：50～15：20	
15：00	ホール打合せ 会場下見						
16：00		園田高演劇部 打合せ	園田高演劇部 15：50～17：00	園田高演劇部 15：50～18：00			
17：00	市内視察		第九合唱団 17：30～18：40				
18：00				フィードバック			
19：00							
20：00							
21：00							

プログラム詳細

高校生（園田学園高等学校演劇部）対象ワークショップ
10月６日（木）15：50〜17：00・
10月７日（金）15：50〜18：00

高校生（演劇経験者）を対象に普段行っている準備運動などに加え、更に発展した動きや表現力・創作能力の向上を目指し即興劇などを行いそれぞれ個性が現れたワークショップを行った。参加者同士、普段気が付かない新しい面が発見できるなど、今後の活動に大きな影響を受けた。

第九合唱出演者対象ワークショップ
10月６日（木）17：30〜18：40

高齢者･ワークショップ未経験者を対象に舞台未経験者（※一般公募による第九コーラス出演者）が舞台本番を迎えるにあたり、心と身体の準備方法や舞台上での表現方法などのワークショップを行った。

小学校対象ワークショップ
11月29日（火）10：45〜12：20・13：50〜15：20
（園田東小学校５・６年生）
11月30日（水）８：45〜10：25・13：50〜15：20
（園田東小学校３・４年生）

尼崎市の東部にある園田東小学校では３年生〜６年生を対象に１クラス約25名、クラス替えが無く少人数の児童に対して「物語を生み出す」ワークショップを行った。準備運動、コミュニケーションゲーム、創作時間後、それぞれが作った物語を発表し感想を共有した。

12月１日（木）８：50〜10：25・10：45〜12：20
（潮小学校６年生）

尼崎市の中心部にある潮小学校６年生２クラスに対して「物語を生み出す」ワークショップを行った。準備運動、コミュニケーションゲーム、創作時間後、それぞれが作った物語を発表し感想を共有した。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

①当センターのミッション

当センターは市民文化向上に努めることを主たる目的として設置され、さらには市内の小学校を中心に音楽部門と美術部門のアウトリーチ事業を年間50本程度実施し、次代を担う子どもたちの豊かな感性と創造力を育てながら、地域に密着した事業展開を実施しています。

②現状の課題

音楽部門を担当している私の部署では、小学校へのアーティスト派遣による鑑賞型をメインに実施し、参加する生徒にとっては普段の授業や生活では接することのできないプロのアーティストの生の演奏を間近で体験でき、授業では教えてもらうことのできない音楽や楽器の少し踏み込んだ話が聴けるなどのプログラムが主となっています。

しかしながら現状では、自発性や能動性を引き出したり、個々の性格・特性に合わせたようなプログラムを構築するまでには至らず、鑑賞型に偏った傾向となりがちでした。

③原点回帰として

授業としてただ参加し鑑賞するだけでなく、自然と積極的に参加できるような形態のアウトリーチが当センターのミッションに相応しく必要ではないかとアウトリーチ自体の在り方を検討したところ、演劇の手法を用い、また派遣表現者と担当者による話し合いからプログラムを構築できる「リージョナルシアター事業」が当センターの求める参加型アウトリーチとして適しているのではないかと判断し、参加する方向で話をすすめました。

●企画・実施において苦労した点

まず、参加者を募集するにあたり大きな課題は下記の通りでした。

①このリージョナルシアターをどのように理解してもらうのか、演技指導のためのワークショップとして間違った理解をされないように工夫が必要

②公募かピンポイントにするのか

③ターゲットの年齢層をどう決めるのか

初の試みでもあること、聞き慣れない名称の事業であることなどから、公募ではなかなか理解されないのではないかという不安もあったため、まずは当ホールとの関係性の強い小学校等にアプローチし、事業の趣旨説明など事前の打ち合わせを複数回にわたり行いました。

●プログラムを実施した結果

演劇の表現手法を用いることで、発想や思いを表現して相手に伝えることの素晴らしさを体験することができました。また、参加者の想像力に直接働きかけるプログラムは、自分のことや相手のことを考えるきっかけとなり、他者と協同するコミュニケーション力や異なる意見を尊重して認め合う協調性の向上などの効果が見込まれ、段階を経て身に付けることができることができました。感情や情緒を通して良好な人間関係を築くことにも繋がり、創造的で個性的な心の動きを豊かにし子どもたちが成長できるプログラムにもなりました。

●今後の展望

現在、当センターが行っている、音楽・美術部門のアウトリーチ事業に加え、演劇的な手法を用いたアウトリーチ部門の確立を目指してきたいと思います。そのためにも、当センターとは今まで関わりの薄かった地元および関西圏の演劇人の方々に将来、表現者として参画してもらえるよう、まずは当センターが考えている新しいアウトリーチの趣旨を理解してもらえるよう、関係性を築いていくことから始めていきたいと思います。

当センターのように市からの事業実施補助金が支給されておらず、事業は独自の採算にて実施しているような財団では、経費面での制約が大きく、精度の高い内容かつ継続性のある事業として拡大していくためにはクリアしていかねばならない課題が多いのが現状です。県や市の動向、さらには長期的な助成金獲得など、継続的な実施をするためのプランニング等もあわせて検討していきたいと思います。

街を作る人々に、演劇を贈る

福田 修志

演劇の枠にとらわれない発想へ

尼崎市という地域は「区画整理された住宅街」と「昔ながらの下町」が存在する、というとても幅のある街で、ほどよい「人の繋がり」と「距離感」を持った街だなあというのが僕の印象でした。そうした地域の中にあるアルカイックホールで二つの事業を行いました。一つは、高校の演劇部と小学校で行った演劇アウトリーチ。もう一つは、ホールの自主事業であった『市政100周年記念事業』で『第九』を歌う一般参加者に対するワークショップというもの。どちらも参加者が演劇を、そして表現することを楽しんでくれた様子で、特に『第九』の方々は、違うジャンルのワークショップをしっかりと自分の形で持ち帰ってくれたことが印象的でした。ホールにとっては初めての『演劇アウトリーチ事業』だったことで、ホールの担当者も学校側も、生徒たちがプログラムを体験して、どういった反応を示すのか？また音楽のアウトリーチとはどう違うのか？ということがなかなか想像できない部分がありましたが、実際に実施することで「生徒たちの様子や変化」を目にすることが出来たことが何よりも意義深く、今後この事業を継続する上での力になったと思います。また、演劇の「人間関係作りに働きかける力」なども感じてもらえたことで、「演劇アウトリーチ」が演劇という枠に囚われず、様々な場所で発揮できる物であるという可能性をホール側が見出せたことが成果だと考えます。

演劇アウトリーチの特性

これまで『舞台芸術に触れる場』として機能していたホールが、演劇で『外部（地域）に働きかける』ことを担うようになるのは、ホールとしての大きな一歩です。それは将来の「ホールを訪れる人」に繋がるだけではなく、より良い地域社会を形成することに繋がるからです。

それには「演劇アウトリーチ」の性質が深く関わっています。様々な舞台芸術の中でも特に演劇のアウトリーチは、その他のアウトリーチとは違って、参加者の想像力に働きかける部分が強く、自分のことや相手のことを考えるきっかけを作る事が出来ます。友達や先生とも違う「アーティスト」という存在から、全く違った角度で何かを掴むこともある。そうやって育まれた子供たちが、やがて社会を担う一員になっていく。今回の演劇アウトリーチを経験した子供たちもまた、大きくなった時、これからこの街を、地域社会を作っていくことになるのです。

公共ホールが担い、生み出す価値

『公共』のホールとして、ホールに訪れる人だけを対象にするのではなく、積極的に外部（地域）に働きかけることは、『公共』だからこそ、より多くの人を対象にすべき責任であり、地域社会に対する手助けを担う行為に他なりません。教育や福祉といった他分野との繋がりを広げていくことで、ホールは『芸術の可能性』を提示し、『地域社会に対する潤滑油のような効果を提供できる場』という新しい価値を生み出す。誰もが発信する（表現する）時代の中で、その楽しさと難しさをしっかりと伝えられることが出来たら、ホールはこれからの時代にこそ必要な場所へと変わるのです。

「自分の言葉」が財産になる

その一歩を踏み出したホールが進む道は、芸術（演劇）に何が出来るのかを考えること。その道は自分達で見つかる物もあれば、アーティストからもたらされる物もあるかもしれません。様々なアーティストが持つ多様な価値観を取り入れ、ホールにとって、地域にとって必要なことを考え、提供していく。それらを実現していくために担当者には是非「自分の言葉」を持って欲しいと思います。借り物の言葉ではなく、実際に企画し、担当することで生まれる「自分の言葉」こそが、様々な問題を解決する手段となり、その劇場の、そしてその街の財産となるのです。

継続的に事業を続けられる仕組みを考えたり、目的や意義を見失わないためにも「自分の言葉」を手にすることは何よりも大切だと思うのです。

ながす未来館（熊本県長洲町） 実施データ

実施団体	熊本県長洲町
実施ホール	ながす未来館
担当者	金木 貴子・草野 葵
派遣期間	１回目派遣　平成28年 ９月１日（木）～ ９月２日（金） ２回目派遣　平成29年 ２月４日（土）～ ２月７日（火） ３回目派遣　平成29年 ２月25日（土）～ ２月28日（火）
アーティスト等	アーティスト：多田淳之介　　アシスタント：永井秀樹　佐山和泉

■１回目派遣内容
９月１日（木）アウトリーチ先（腹栄中学校・長洲中学校）訪問・下見・打合せ　ながす未来館 打合せ・下見
９月２日（金）JN ダンスクラシックバレエ 岩田 順子先生 スタジオ訪問、長洲町社会福祉協議会・劇団かたつむり 打合せ
町内近隣視察、未来館 WS 企画打合せ

■２回目派遣内容
２月５日（日）10：00～12：00　こども（小学生）対象ワークショップ（参加者20名）
14：00～15：20　一般公募・社協対象ワークショップ（参加者14名）
２月６日（月）10：45～12：35　長洲町立 腹栄中学校 アウトリーチ（対象：１年１組　32名）
13：55～15：45　長洲町立 腹栄中学校 アウトリーチ（対象：１年２組　31名）
19：00～20：20　企業（肥後銀行・信用金庫）対象ワークショップ（参加者12名）

■３回目派遣内容
2月26日（日）10：00～12：00　こども（小学生）対象ワークショップ（参加者19名）
14：00～15：20　一般公募・社協対象ワークショップ（参加者20名）

2月27日（月）10：50～12：40　長洲町立 長洲中学校 アウトリーチ（対象：１年１組　26名）
14：10～16：00　長洲町立 長洲中学校 アウトリーチ（対象：１年２組　26名）

スケジュール

熊本県長洲町／ながす未来館

	１回目派遣		２回目派遣		３回目派遣	
	９／１（木）	９／２（金）	２／５（日）	２／６（月）	２／26（日）	２／27（月）
9：00						
10：00		バレエ 岩田先生 訪問	こども（小学生） 対象 WS 10：00～12:00 （途中休憩あり）	腹栄中1年生 10：45～15：45 （途中休憩・給食交流あり）	こども（小学生） 対象 WS 10：00～12：00 （途中休憩あり）	長洲中1年生 10：50～16：00 （途中休憩・給食交流あり）
11：00		町内近隣視察				
12：00		社協 打合せ				
13：00						
14：00		劇団 打合せ ホール 打合せ	一般・社協　対象 WS 14：00～15:20		一般・社協　対象 WS 14：00～15：20	
15：00	腹栄中学校　下見					
16：00	長洲中学校　下見					
17：00	ホール 下見 打合せ					フィードバック
18：00						
19：00				肥後銀行・信用金庫対象 WS 19：00～20：20		
20：00				フィードバック		
21：00						

プログラム詳細

公募子供向けワークショップ
２月５日（日）10：00〜12：00
２月26日（日）10：00〜12：00

一般公募で集まった町内外の小学１〜６年生を対象に、体や言葉を使った遊びやゲームを通して、自由に考え伝える・表現する楽しさを学んでもらうワークショップを実施しました。

はじめに､｢ケイドロ（警察役とドロボー役に分かれての鬼ごっこ)｣､｢だるまさんが転んだ｣のゲームで体をたくさん動かして遊んだ後、次はグループに分かれ｢それは誰ですか？・どこにいましたか？・何をしましたか？・何と言いましたか？・みんなは何と言いましたか？・最後はどうなりましたか？｣と書かれた紙にグループ内の仲間には見えない様に、１つの項目に１人ずつ、自分の思いついた文を自由に書いて貰い、それを紙芝居にしてＴ☆Ｊ（多田さん）に発表して貰いました。もちろんグループ内の他のお友達は何と書いたのか分からないので、全体の文章はチグハグでしたが、何の繋がりもない文を自分達が考えたテーマに基づき一つの物語にして紙芝居を作ってしまう、大人が思い付かないような奇想天外なストーリーに､思わずアーティストやアシスタントの先生達も笑顔になり、私たちスタッフも子供達の発想力にただただ驚かされるばかりでした。

また、絵本に出てくる登場人物になって絵本の世界を再現し発表してもらう場面では、ダンボールや画用紙で絵本にはない物まで作り出し、子供達の個性が感じられました。

初めて会う子供達でもすぐに仲良くなり楽しそうに遊び、自分の気持ちを伝え合い協力し合う姿や､｢友達ができてよかった。また来る！｣｢Ｔ☆Ｊにまた会いたい！｣｢26日も参加するよ！！｣と言ってくれた子供達の笑顔がとても嬉しく、印象的でした。

一般・社協向けワークショップ
２月５日（日）14：00〜15：20
２月26日（日）14：00〜15：20

一般公募で集まった中学生以上の方、長洲町社会福祉協議会の職員を対象にしたコミュニケーションスキルアップワークショップです。10代〜50代の幅広い年齢の方々にご参加いただきました。

まず輪になり、指名する人に向かって指パッチンをしながら｢自分の好きな色｣を言い、指名された人も好きな色を言いながら次の人に指パッチンして指名して…を繰り返し、最後の人はアーティストを指名して終わる、というゲーム。

｢今指名した人をもう一度指名する｣｢指名する人の名前を呼びながら指名する｣などお題も増えて、最終的にはお題2つを同時に行いそれぞれ指名していく…と少し頭を使ったゲームや、人とカブらないように立ったり座ったりするゲームでは、思わず参加者から笑い声が溢れる場面も。

また、グループに分かれて１分間で｢しりとり｣をし、２回目は１分間で１回目と同じ｢しりとり｣を再現する発表などして貰いました。

初めはぎこちない様子でしたが、進んでいくにつれ参加者の笑顔が増え、グループ同士協力し合っていたのが印象的でした。

アンケートでは､｢人見知りで人と話す事に苦手意識があり不安だったけど、今回参加して良かった！｣､｢言葉がないと伝える事の難しさを感じた｣や｢相手の仕草・表情を見て言葉で伝える事の大切さを改めて感じた｣などの感想を多く頂きました。

プログラム詳細

長洲町立 腹栄中学校アウトリーチ
２月６日（月）10：45～12：35／11：45～13：55
長洲町立 長洲中学校アウトリーチ
２月27日（月）10：50～12：40／14：10～16：00

町内２校の中学１年生を対象に、演劇の手法を使って他者とコミュニケーションを取りながら、生徒自身の発想力・創造性・表現力を高める事を目的としたアウトリーチを実施しました。

まず、生徒全員でエアー縄跳びをし、縄を回す人・跳ぶ人が動きを合わせる事で、見えない縄があたかもそこにある様に見えてしまう不思議でユニークな演出を実際に見て跳んで体験してもらい、アーティストが指定した建物やマークを体で表現し発表する時や、「ゴー＝動く」「ストップ＝止まる」の掛け声に合わせ、また掛け声と反対の動きをとる時、最初は照れたり緊張しつつも、お互いの意見を伝え合いながら一生懸命取り組んでいた生徒達の表情や姿勢がとても印象的でした。

そして「走れメロス」の一節の演出を、５～６人のグループに分かれ「場所はどうしようか」「どんな道具を使い、どういう動きにしようか」など、様々なアイディアを出しながら作り上げ順番に披露してもらいました。

終了後の生徒達のアンケートでは、今回のアウトリーチを通じて「とっても楽しかった。」という声の他に、「プロの演出家と触れ合い、俳優の迫力ある演技を間近で見た事が刺激になった。自分も演出を経験した事で、表現するのは難しいけど演出や演劇に興味が湧いた」「改めてコミュニケーションが大切だと気付いた」「演出方法によって、同じ場面でも全く違うものに映る面白さを感じた」という感想がありました。

長洲中学校では毎年、文化学習発表会で２年生が演劇を披露するとの事で、きっとこの日の経験が役に立つのではと思います。

肥後銀行・信用金庫向けワークショップ
２月６日（月）19：00～20：20

研修の一環として、地元の一般企業２社を対象にしたコミュニケーションスキルアップワークショップを実施しました。

今回は肥後銀行・熊本中央信用金庫の社員の皆さんが参加してくださいました。

２月５日・26日に行われた一般・社協向けワークショップ同様、最初は輪になり「自分の好きな色・好きなおにぎりの具」などを言いながら指パッチンや指差しをして次の人を指名し最後の人がアーティストを指名して終わる、というゲーム。

しかし、数字に強く日頃から頭を使っている職業柄か、前回指名した人を覚えている人が多く、スムーズにゲームが進んでいきとても驚きました。

また、グループ内で数字を割り振り、他のグループの同じ数字の人を自己紹介しながら見つけていくゲームや、グループで隣の人が言ったセリフを言って、今さっきまで話していた会話を同じ時間内で再現する発表などをして貰いました。

双方の職場自体が近く、参加者同士も普段から交流があり、終始、和気あいあいな雰囲気だった80分間のワークショップでした。

「相手がどう考えて、どう見ているのか、普段気づかない視点から物事を客観的に捉えるキッカケを学ばせてもらった」「とても有意義な時間でした。今後の職場や接客対応でのコミュニケーションに生かしていきたい」という感想を多く頂きました。

担当者の報告・評価

●この事業への参加動機

◉当館はホールを一部の人だけでなく、次世代を担う子供からお年寄りまで「世代間交流ができる場」・「共有する空間となる場」を目指し様々な事業に取り組んでいます。

特に長洲町の次世代を担う子供達へ力を入れていきたいと思っていたのと、一昨年、現代ダンス活性化事業で初めてのワークショップやアウトリーチを経験させていただいたことで繋がった行政・学校・企業・各文化団体、ワークショップや公演参加者の皆さんとのネットワークを１回で終わらせることなくホールの今後に繋げていきたい、また、継続していくことで普段ホールに関わりがない人や存在を知らない人達にももっと文化に触れ、身近なものとして興味を持ってもらううきっかけ作りへと繋げていきたいと考え、今回リージョナルシアター事業に応募、参加させていただきました。

◉長洲町や地元近隣地域に根付き活動されている今年創立40周年を迎えた市民劇団「劇団かたつむり」ですが、今まで劇団を担ってきたメンバーが退団し団員数の減少、それでもなお若手メンバー主体の中で毎年１年オリジナルの公演を続けています。「演劇の手法」という観点から、この事業に参加する事で将来的にホールと共に町の中心となり長洲町の文化活動を引っ張っていく存在となる様、また、次世代のスキル伝承や若手団員のレベルアップに繋がるいい機会として、当館がバックアップをしていきたいと考えました。

●企画・実施において苦労した点

【担当者自身の反省点】

担当者が途中で変わり、前任者との情報共有や引き継ぎがうまくいかないまま事業が進行していき、地域創造の担当の方々、担当アーティスト、企業・団体や学校の先生方には連絡・調整不足等でとてもご迷惑をかけてしまったことが今回一番の反省点。とにかく、準備不足の一言。

【一般・子供向け公募ワークショップの集客について】

公募ワークショップでは、参加者がなかなか集まらず、普段から当館をご利用してくださっている一般の方や、子供向けワークショップではダンスやバレエの先生への声掛けにて集まってくれた各スタジオの生徒の皆さんの参加で偏ってしまい、純粋にチラシを見て応募してくれた参加者が少なかったこと、ダン活での繋がりがうまく活かせなかったのが残念でした。

【各中学校アウトリーチ実施に関して】

細かな反省点はたくさんありますが、アウトリーチに関して担当の学年主任の先生ともっと時間を掛けて打ち合わせをするべきだったと思います。

また、生徒の自主性を高めるためのアウトリーチであるにも関わらず、担任の先生が声掛けや指示を行なっていて何度か当館の副館長が止めに入っており、この件に関して学年主任の先生だけでなく、担任の先生とも実施における趣旨をお話しご理解いただく機会を作るべきであったと反省しました。

それでも先生方にはその都度迅速にご対応していただき、本当に今回は各中学校の校長先生をはじめ教頭先生や学年主任の先生方のご理解とご協力あってのおかげだと強く思いました。

【企業向けワークショップに関して】

今までいろんな事業を展開してきましたが、「企業研修プログラム」として取り入れるのは初めての試みで、企業のトップの方にも快く受け入れていただき、私自身この形に持っていく過程はとても勉強になりました。

ただ、実施日が平日であったことで銀行ということもあり、参加希望だったが行けなくなった、など…、最終的に参加者が少なかったのが残念でした。対象とする企業により、組み込むプログラムの実施日・時間をよく考慮する必要があると感じました。

ワークショップ終了後、社員の皆さんから「このような研修は初めて。とても勉強になった」とのお声をいただき、ホール側の反省点もいくつかありますが、今後も企業と連携してこういった「パフォーマンス・スキルアップの向上」プログラムをどんどん取り入れていきたいです。

●プログラムを実施した成果

【全プログラムを通して】

下見の段階で、募集チラシには敷居が高く感じる「演劇」という言葉をなるべく使わず「遊ぶ・楽しむ・学ぶ･表現する」という言葉を取り入れ、具体的にきてくれそうな、遊び心をくすぐる内容の文章にしました。

参加者の中にながす未来館にこういう大きなホールや場所があって、イベントなど開催していること自体知らなかった方もいらっしゃって、ホール側としてまだまだ周知や認知度の向上が課題として残りますが、今回参加していただいたことでまず会館を知ってもらった事、そして、参加してくれた何人かの子供達がその後も遊びにきてくれるようになったことに大きな収穫を感じています。

【各中学校アウトリーチにおいて】

今回のアウトリーチでは、自由に考え、仲間同士で対話をしながらイメージを共有し発表して貰うことで、「みんなそれぞれで色んな表現方法があり、正解も不正解もない」、「多様な価値観を認め合う」ということを演劇の手法を使って体験してもらいました。「演出家」の存在は知っているけれど、実際どんな仕事をする人なのか？ということも知って貰えたと思います。そしてプロの演出家、プロの俳優の演技を間近で見た事で「演出・演劇に興味が湧いた」との感想を多くもらえたことが嬉しく、地元に市民劇団があることを知ってもらったことで、将来的にこの経験を通して劇団と繋がり、これからの劇団を担う大事なキーパーソンとなってくれることを強く望んでいます。また、プログラム詳細でお話した様に、長洲中学校では毎年、文化学習発表会があり２年生が自作の演劇を披露するとのことで、進級した生徒たちがこのアウトリーチの経験を思い出し、発表会でぜひ生かしてくれたら嬉しいです。

【実施後の劇団・団員の変化など】

今回、こども向けワークショップでは、劇団の皆さんにアシスタントとしてご協力いただけた事は非常に有意義でした。また、一般公募ワークショップにもご参加いただき、団員歴の短い若手メンバーが多い中、やはり公演前の練習ではどうしてもセリフを言う時に「うまく伝えなきゃ！」と力んで身構えてしまう団員も少なからずおり、今回参加して実際経験してみて、多田さんと直接お話をさせてもらったことで、型としての演技ではなく、気持ちの面から自然な表現力と基本を学べた、と代表の永田さんが仰っていました。

一般公募ワークショップ（５日・26日の２日間）に参加してくれた女の子が、劇団に興味を持ってくれ早速終了後に永田さんと色々お話をして、次の練習日に見学に行きます！と嬉しそうに言って帰って行かれました。

●今後の展望

最後に、今後の展望ですが、特に力を入れている一つに「子供」への取り組みがあり、携帯やゲーム機が会話や遊びの主流となっている今の子供達に、普段学校や家庭ではできないことを非日常的な空間で体験してもらい、子供達の個性や多様性、無限の可能性を引き出してあげることもホールの役割であると考えています。少しだけ敷居が高く聞こえる「演劇」も「基本、遊ぶ！」ことで、今回２日間実施したワークショップに参加してくれた子供達には「演劇のプロセス＝楽しむ」ことを体験してもらい「Ｔ・Ｊ（多田さん）が来るならまた次回も行きたい！」という関係性をうまく築けたように思いました。

また、指定管理スタート当初から構想していた、長洲町の歴史や伝統などを盛り込み、参加者のオリジナルストーリーなどを融合させた「市民参加型の演劇公演（創作ステージ）」の実現を目標として、そういった関係性や繋がり・コミュニティをさらに広げて、多田さんと演劇の手法を使ったプログラムを継続して行っていくことで、ホール側の目指す芸術文化振興の活性化・貢献性も見出せるのではと思っています。

人と町と文化…長洲町という地域柄、定着し実を結ぶまでは時間もかかり地道ではあるけれども、当館の理想とするイメージを長いスパンで考えた時に、この地道で小さな一歩ずつが、長洲町の文化振興の大きな一歩となるように、私達が今回リージョナルを実施し学んだことを活かし、今後のながす未来館の事業展開を進めていければと思っています。

寄り添うことの大切さを知っているホール

多田 淳之介

ホールの積極的なスタンスを活かしていく

リージョナルシアターでは、時に担当者の悩みを聞き、打開策を考えるというのもこの事業の使命だと思いますが、せっかく参加していただくのなら、この事業を参加団体のミッションに上手く利用してもらえると個人的には嬉しいです。今年度のながす未来館では、そういったプログラムができたのではないかという手応えを感じられました。最初の合同研修会での打ち合わせから、館長が毎月ロビーを模様替えして子供が遊べるスペースを作っていたり、副館長がひきこもり対策としてホールでマンツーマンのギター教室を開いていたり、ご当地アイドルをプロデュースしていたり、地元の劇団が地域の子供達と紙芝居を作っていたり、地域に開いた活動をされていることがわかりました。担当者がホールのメンバーや事業を説明する時に嬉しそうだったのも非常に印象的でした。

ホールのミッションも割とはっきりと“こども”そして“社会的包摂”に向いていて、当然それに即したプログラムになりました。市内二つの中学校で行ったアウトリーチでは、副館長が保健の先生に掛け合い、保健室登校の子供達を劇場に呼べないかという裏番組もありました。おそらく当日までは子供達が来るか来ないか分からないだろうということで、公式プログラムではなく、もし来たらお話くらいはしましょうという予定だったのですが、当日子供達が10名弱来ることになり、せっかくなので急遽サービスワークショップ（笑）をやることにしました。内容は中学校アウトリーチと同じ「走れメロス」の演出ワークショップでしたが、みんなそれぞれ楽しそうに参加してくれました。公式プログラムではないですがこれまでの関係やホールの思いがないとなかなか生まれない場に参加できたのは嬉しい限りです。

子供を地域劇団と共に支える

２回目、３回目派遣で開催した小学生ワークショップは今後の継続を目指して「こどもみらい学校」というタイトルで行いました。この学校は「あそび」に来る学校というコンセプトは子供達にもわかりやすく、ホール内でのドロケイから始まり、遊んでいるうちに紙芝居ができたり、絵本が演劇になっていたり、ホールを子供達の遊び場に、寄り合える場所にというホールの思いに即したものになったと思います。他にも社教、銀行員へのインリーチ、一般向けワークショップも行いましたが、ほぼ全てのプログラムに地元の劇団かたつむりのメンバーが参加してくれたことも非常に良かったです。地元劇団があるとメンバーのスキルアップという話にまずなりがちですが、ホールとしては彼らにアウトリーチを担って欲しい、その裏には、ホールの事業に参加することで劇団がホールを利用する際にホールが協力するための理由作りという地域劇団育成への思いがあってのことです。

“プログラムの外側”の重要性

こちらとしても、今回の事業一回限りで終わってしまうようなプログラムはできるだけやりたくないので、例えば地元の劇団のメンバーが小学生のワークショップにアシスタントとして参加してくれると、次に彼らが何かやるときに子供達と繋がってくれますし、彼らの参加は全体としてホールの今後に繋がるプログラムになった一因だと思います。地元劇団のメンバーとの裏番組として自分やアシスタントで東京から来た俳優達との演劇相談室（笑）も開催しました。

裏番組ばかり報告書に書いて良いのかという感もありますが、結局はアーティストが上手いこと利用されているだけじゃないかと思われるかもしれませんが、リージョナルシアター事業の本質はこういうところにあるんじゃないかと思っています。プログラムのコマ数や諸々制限はあると思いますが、この限られたコマ数をどうこなすかではなく、ホールや団体のミッション、今後の事業展開をどう進めるためにこの事業を利用したいかだと思います。ぜひみなさんこの事業を利用してください、我々派遣アーティストもそのためにやっているのだと思います。

平成28年度リージョナルシアター事業報告書
発行・編集 ――――一般財団法人地域創造
発行日 ――――――平成29年3月31日